

研究動向

アジアの生活と文化

本プロジェクトは、2001・2002年度のプロジェクトを継承したもので、アジア地域における固有の生活と伝統、それらを支える文化的な考え方などを明らかにし、多文化共生のあり方を探ることを目的としている。プロジェクト・メンバーは、八耳俊文（教養学科）、渡邊良智（教養学科）、関谷雄一（一般教育）、鈴木すゝ江（家政学科）および松本美鈴（家政学科）の5名である。

プロジェクト全体としては、研究会を兼ねた講演会を開き、第1期目には夏期休暇を利用して大韓民国への現地調査を実施した。

これまでに開催した講演会の概要は、次の通りである。2004年度（第1期）。6月29日開催、伊藤亜人氏（東京大学）「アジアの宗教」。7月22日開催、陳力衛氏（目白大学）「明治初年の日本僧の北京見聞録」。11月5日開催、三浦明子氏（本学非常勤講師）「最近のインドの対外関係」。11月19日開催、菊池靖氏（早稲田大学）「文化的多様性と日本人社会行動様式」。2005年度（第2期）。6月20日開催、石戸光氏（千葉大学）「アジア太平洋地域の多様性—国際社会と市民社会の相互連関」。7月8日開催、金智美氏（本学非常勤講師）「韓国の仮面劇に見られる民俗文化」。さらに、11月4日、山川隆氏（東京大学）「東南アジアの農業とバイオテクノロジー」および11月10日、茨木祐子氏（本学非常勤講師）「白袴と緋袴」の講演会の開催を予定している。

2004年9月1日から4日、メンバー全員で、ソウルおよびソウル近郊への現地調査を実施した。ソウル市街では、伝統の犬食を提供する牡丹（モラン）市場、韓国の歴史と美術を集めた徳寿宮、景福宮、国立民俗博物館などを巡っ

た。ソウルから電車で1時間程の水原市では、李朝時代に造られた巨大な城壁に囲まれた華城、李朝時代の村の様子が再現された韓国民俗村を訪れた。民俗村では、綱渡り・板飛・両班の伝統婚礼式などの生活様式や伝統芸能を観賞した。

講演会や現地調査を活かして、各研究員はそれぞれ個別の研究を進めている。以下に各研究員の中間報告をする。

家庭における年中行事と食物の関わり

わが国の家庭における伝統的な年中行事は、稲作儀礼を中心とした日本古来の生活習慣のうえに、中国の信仰的行事を取り入れた貴族や武家の風習の影響を受けながら成立したとされている。このような年中行事には、神に供える供物として各種の食物が用意され、行事食として定着した。行事食は、ハレの日の食であり、地域性が強い。家族で祝い共食することで、家族の絆を強めてきたと考えられる。しかし、高度経済成長期以降の外食や中食の発達にともない、家庭内の日常（ケの日）の食が変容するとともに、行事食にも変化が現れた。すなわち、家庭や地域独特の行事食の伝承が阻まれている。

本研究では、大正末から昭和初期の文献調査および2005年度実施のアンケート調査の分析を通して、わが国の家庭における行事食の変化を捉え、現代の家庭における行事食の特徴・意義の考察を試みたい。（松本 美鈴）

和紙を語る人々

『枕草子』中の清少納言の「陸奥国紙」への絶賛はもとより、日本人は和紙に強い愛着を抱き、和紙への思いを切々と語ることを憚らない。またこれを語るとき、しばしば「洋紙」が引き合いに出されて比較され、「和紙」の強靱さと美しさを念入りに浮かび上がらせるのである。

例えば、高田宏は次のように書く。「正倉院に保管されている種々の和紙は千年を超える時に耐えて今なお美しい。洋紙には考えられない強靱さである。その紙をつくった人びとが、千年後にも傷まないで残ると考えたとは思えないけれども、自然の力を最大限に生かしている和紙というものは、それだけの優れた耐久性を持っているものなのだ。」（『和紙』淡交別冊）

植物の繊維が直に見えたり、またそれが感得できる和紙には、大自然の大きさや備わる。毛筆文化と切り離せない和紙に、日本人が愛着を持つのは当然である。

しかし、和紙を客観的に説くべきはずの「和紙入門書」や「和紙事典」等の書物においてさえ、その説明文はときに和紙への愛を語りがちになる。この不思議について、文献資料と実物資料の双方から考えてみたい。（鈴木すゝ江）

日本人のアジア・イメージに関する研究

日本にとってアジアは欧米とともに重要な地域である。近代日本は欧米列強の圧力のもと、殖産興業・富国強兵の方針を採用して、欧米に追いつき追い越すことを国家目標とした。「脱亜入欧」策で、日本は列強の1角を占めたが、第2次世界大戦で米英に敗れた。戦後は欧米だけでなく近隣のアジアも重視しているが、アジアとの政治的・経済的・文化的摩擦は解消されず、友好関係が築かれているとはいえない。ア

ジアと日本との摩擦の原因の1つに、日本人のアジア・イメージが作用していると考えられる。その日本人のアジア・イメージの基本は、日本のナショナリズム形成との関連で明治時代に形成されたと考えられる。

この研究では、明治時代の新聞報道の分析を通して、日本のナショナリズム形成とアジア・イメージ成立との関連を探ることで、日本人のアジア・イメージの特徴の考察を試みている。それはまた、危機的状況におけるマス・メディアの世論形成機能に関する研究でもある。

（渡邊 良智）

岡田家武の研究

日本にとってアジアとは何か、アジアと日本との関わりを考える一助として、岡田家武の生涯をとりあげたい。岡田家武は1904年、東京に生まれ、1926年に東京帝国大学理学部化学教室を卒業、同大学院を経て、1931年上海自然科学研究所化学科の所員として赴任、戦後もそのまま中国に残り、四川省成都の大学や研究機関に勤務したが、1966年、文化大革命の中でスパイ容疑で逮捕され、1970年獄死した。岡田家武の自然科学の業績には、地球化学を日本語で最初にまとめた『地球化学』、雑誌『上海自然科学研究所彙報』に発表した内蒙古のゲリユサイトに関する論文などがある。早くから中央アジアに関心をもち、地球化学的研究をめざし、上海に赴任したが、上海事変を体験、日中戦争深まる中で研究活動を続行するとともに、中国文化に大に関心を寄せた。中国名を名乗り、中国語で日常生活を過ごし、中国人街に住んだ。彼は何に固執していたのであろうか。生涯を明らかにするとともに、彼が大事にしたことを考えてみたい。関連文献を収集するとともに、2005年3月、上海で開かれた国際シンポジウム参加のおり、短時間であるが、現地調査もおこなった。（八耳 俊文）

アジア社会の家族・組織・共同体

2004年度4月より日本を手始めにアジア社会の家族・組織・共同体の動態の様相につき文献分析や現地調査そして教育現場での実証的なデータを基に分析を行っている。

現代社会において家族構造が大きく変貌を遂げているのは元より日本やアジアに限ったことではないが、家族はそれが含まれる共同体のあり方、時事的状況に大きく影響を受けていることもこれまでの文献分析により明らかになった。

日本の事例を挙げると10年前の阪神・淡路大

震災を機に、被災地域の人々が協働活動に取り組むようになったことは、広く人々に生活上の共同体・家族の重要性を再認識させている。昨年の新潟県中越地震、スマトラ島沖地震そして最近ではパキスタンにおける地震に対する日本の人々の考え方を様々なメディアによる情報を基に分析してゆくと、確かに10年前の震災を経験する前よりも、共同体・家族の存在・役割を踏まえた協働活動を積極的に考える傾向が現れているのではないだろうか。

現代アジア社会の人々の中で家族・組織・共同体の概念がどのような状況的变化を遂げているかを更に追究していきたい。（関谷 雄一）